# 防災・減災のページ

## むすび塾

## 第94回ワークショップ　@仙台大

# 学生と住民 連携さらに

災害時、地域と若者との協力について話す参加者＝1日、仙台大

### 地域と共に備え語り合い

河北新報社は1日、通算94回目の防災ワークショップ「むすび塾」を宮城県柴田町の仙台大で開催した。学生ら7人と行政区長3人が参加し、東日本大震災を振り返るとともに今秋相次いだ台風に対する備えの重要性などを確認。今後、地域防災力向上のため、学生と住民が連携を一層強めていくことを誓った。

震災当時、中高生だった学生は被災体験を披露した。石巻市出身の4年菅原彰太さん(22)は「津波で家が流された。避難所では3日間何も届かなかった」と語った。

4年納代真奈さん(21)は「仙台市の実家に1人でいる時に揺れが起き、家は全壊した」と語り、4年上泉将磨さん(22)も「当時、いわき市に住んでいたが、福島原発事故の影響も考慮し福島市に移った」などと回顧した。

被災経験の教訓を生かし、台風襲来前に早めの行動をとった例も紹介された。4年村上隼人さん(22)は「震災では陸前高田市の実家が津波で流された。今回の台風も警戒し、アパート2階に住む友人宅に身を寄せた」と話した。

大学院2年忠鉢礼菜さん(25)は「宮城に接近する前からニュースを確認し、家の窓に段ボールを張って風雨に備えた」と明かした。

行政区長からは台風19号を踏まえ、課題と対策について報告があった。第4行政区長の阿部通夫さん(69)は「被災者の生活再建や心のケアが行き届いていない」と打ち明け、第29C行政区長の滝沢虎雄さん(79)は「水害では低地は冠水、山間は土石流への警戒を怠れない」と訴えた。

第19行政区長の平間栄雄さん(73)は「台風19号で緊急速報メールが出た時、外は暗く高齢者はもう逃げられない時間、雨量だった」と述べた。

情報伝達の大切さについて4年高橋雅人さん(22)は東日本大震災を振り返り、「名取市に住んでいたが、市全体が津波にのまれるとデマが流れた。正しい情報が伝わらないのは怖い」と指摘した。

参加者は「情報は早く正確に入手しよう」との認識で一致。助言者として参加した東北大災害科学国際研究所プロジェクト講師の保田真理さん(63)は「学生が暮らす町という利点を生かし、学生と地域住民が平時から地域行事を通じて顔が見える関係をつくってはどうか」と提案した。

4年磯崎彩喜子さん(22)は「今回のむすび塾を機に地域住民の方々と積極的に交流していきたい」と参加に意欲をみせた。

ワークショップでは情報共有の在り方もテーマとなった

### 大学の体育団体、サークルと地域の災害時支援協定の勧め

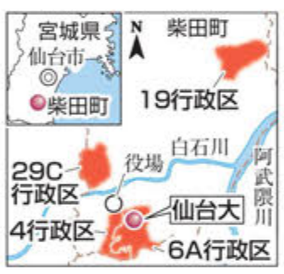
イラスト・板垣潤　　監修　減災・復興支援機構

## 柴田　震災で震度5強

### 台風19号 床上浸水500棟

宮城県柴田町は県南のほぼ中央に位置し、町内を阿武隈川と白石川が流れる。隣の大河原町へと続く白石川沿いの「一目千本桜」は桜の名所として知られる。

東日本大震災では震度5強を観測し、揺れで2人が転落死したほか、建物202棟が全半壊した。避難所28カ所が開設され、一時2300人が避難。電気の復旧に8日間を要した。




今年10月の台風19号では、記録的な大雨により床上浸水約500棟、床下浸水約550棟、河川やため池ののり面の崩壊130カ所の被害が出た。犠牲者はいなかったが、浸水地域で71人が自衛隊に救助された。

台風19号の大雨により町内各地で浸水被害が相次いだ＝10月13日、宮城県柴田町東船迫

## 仙台大　健康づくり支援 仮設で運動指導

仙台大は北海道・東北唯一の4年制体育単科大学として1967年に開学し、現在は体育、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道、子ども運動教育の6学科がある。98年に大学院を開設した。

卒業生の進路は一般企業のほか、教員、警察官、トレーナー、栄養士など。これまでボブスレー、スケルトン、ボートなど五輪の日本代表も輩出している。

学生と地域の連携にも力を入れる。大学で養成した「健康づくり運動サポーター」を地域に派遣し、介護予防、生活習慣病予防に取り組むほか、地元小中学生を対象に各種スポーツ教室も開いている。

東日本大震災では学生らが、宮城県女川町、亘理町などの仮設住宅や災害復興住宅で運動指導を行った。台風19号でも、丸森町をはじめ仙南の2市2町で被災住宅の泥かきや家財搬出に協力している。

## ■助言者から

### 日頃からの交流大切

東北大災害科学国際研究所プロジェクト講師　保田　真理さん(63)

仙台大の学生と宮城県柴田町の町内会関係者がそれぞれ、東日本大震災の経験を生かして普段から備え、台風19号の豪雨の際も実践できていたと感じた。

学生たちは津波被害や避難生活などを踏まえて、備蓄や住民とのコミュニケーションを心掛けていた。アパート1階に住んでいる学生が2階の友人宅に避難したり、電池式のラジオを用意したり、被災体験が命を守る糧になっている。

災害は繰り返し起きるが、被害は人がどう行動するかで大きくも小さくもなる。台風19号で町の被害が少なかったのは、行政区長らが地域の地形や住民事情をよく理解し、備えや覚悟を持って行動した結果だろう。

防災は学生の力も住民の知恵も必要で連携が大切だ。被災時に助け合えるように祭りやイベントで交流し、日頃からつながっていけるといい。むすび塾でできた連携の種を育ててほしい。

## ■むすび塾に参加して　―仙台大

**●被災体験を発信**　震災の時は高校生で、鶴岡市に住んでいた。大学進学後、宮城県女川町や亘理町で健康支援に入り、被災者に接してきた。台風19号に備え、窓に段ボールを張った。災害が増えているので震災や台風被害の体験を他の地域に伝えたい＝**大学院2年・忠鉢礼菜さん(25)**

**●正確な情報必要**　震災発生時、名取市に住んでいた。正確な情報入手ができず、津波で市全域が津波にのまれるというデマが流れた。正確で迅速な情報が必要だ。台風19号で緊急速報メールが届いた時は、逃げられる状況ではなかった＝**現代武道学科4年・高橋雅人さん(22)**

**●地域に積極関与**　中学1年生で自宅に1人でいる時に震災に遭った。揺れで家は全壊し、逃げ道を確保していなかったら危なかった。日頃映像撮影で地域の方と接点がある。就職後も積極的に地域と関わっていく＝**スポーツ情報マスメディア学科4年・納代真奈さん(21)**

**●教訓を伝えたい**　震災で石巻市の家は津波に流され避難所生活を送った。3日間何も支援が届かなかった。この経験から台風19号に備え、水や食料を確保した。自分たちは震災体験を語れる最後の世代になると思う。次の世代に教訓を伝えたい＝**体育学科4年・菅原彰太さん(22)**

**●防災意識を持つ**　警察官の父が多忙で、震災時は母と兄と水や物資を集めてしのいだ。台風19号では高台の自宅に友人を呼び、浸水した友人宅の片付けも手伝った。日頃の防災意識が大事。語り合いの話を周囲に伝え、備えにつなげたい＝**現代武道学科4年・上泉将磨さん(22)**

**●台風で早め避難**　震災時は中学1年生で陸前高田市で津波被災した。避難所に身を寄せ物資の配布も手伝った。台風19号で下宿前の川が増水し、前もって相談していた建物2階の友人宅に早めに避難した。地域の人との関わりを大事にしたい＝**現代武道学科4年・村上隼人さん(22)**

**●地域理解深める**　震災後は仙台市の自宅でカセットコンロや水などを備蓄している。台風19号では最新情報をチェックするよう心掛けた。慣れない土地では防災マップなどを確認しておくことが重要。普段から地域と関わり、交流したい＝**現代武道学科4年・磯崎彩喜子さん(22)**

## ■行政区長ひとこと

**●早期避難に課題**　台風19号では、2階への避難しか選択肢がないような状況になる前に、早期の避難を促したかったが、難しかった。行政の指示を重視する傾向がある年配の人でも、若い人が呼び掛けると一緒に逃げるのではないか。これからは地域や住民が自分で考えて避難すべきだろう＝**第4行政区長・阿部通夫さん(69)**

**●若者と接点持つ**　中高生で東日本大震災を経験した学生たちが、水、食料の備蓄や早めの避難など、台風19号の対策をしていて頼もしかった。暮らしている地域は高齢者が多い。災害発生時だけでなく、普段から若い人たちが地域に関わってくれるとありがたい。花見やホタル鑑賞会に招待したい＝**第19行政区長・平間栄雄さん(73)**

**●旗使い安否確認**　東日本大震災の後、地域で安否確認旗を作った。被災時に無事だった家は玄関先に旗を出す決まりで、旗のない家を救援する訓練もしている。震災を経験した学生たちがつらい思い、悔しい思いを繰り返さないように自ら考え、備えの行動をしていることに感激し、刺激を受けた＝**第29C行政区長・滝沢虎雄さん(79)**

東日本大震災の体験を振り返り、専門家と共に防災の教訓や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022（211）1591。

次回のむすび塾は12月1日、宮城県亘理町で開催します。